

朝夷巡嶋記

第二編

卷一

~ 13
704
6

5 6 7 8 9 170 1 2 3 4 5 6 7 8 9 180 1 2 3 4 5 6 7 8 9

曲亭馬琴編輯

丁丑孟春
福祿壽號

門 嘉
號 704
卷 6

朝夷巡嶋記第二編

柳齋豐廣畫

書肆
文金堂梓

明治三六年
十月九日購



有序

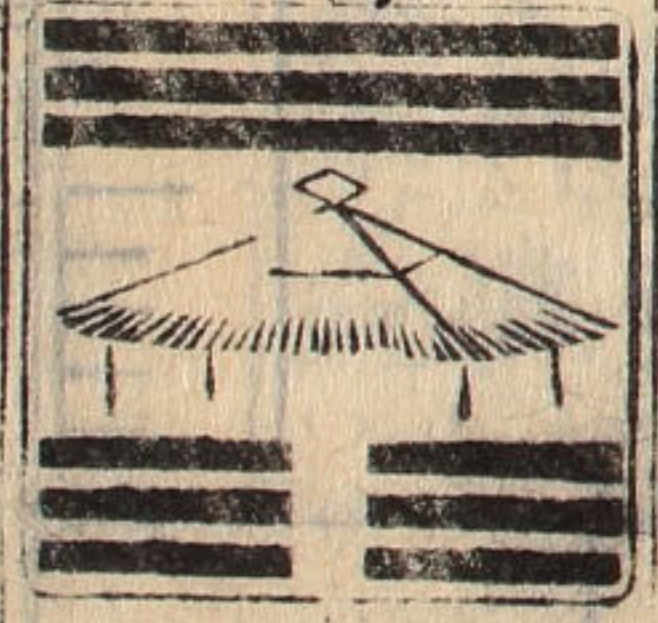


丙子，玄月，朝夷記後集成矣。客見其藁而丐閱，未許。客艷然不悅，遂嘲予曰：夫齊諧小說之鼻祖也。源語女史之巨擘也。然無益名教，自是以降，瑣瑣稗說，年變時化，又不足其才。雖錦心繡口，有可愛者，其於裨益彌遠矣。子亦以彼為祖乎？以此為師乎？費思慮於戲墨，不知老

之將至。謂之智可乎。窺新奇於時好。敢
欲殉于名利。謂之才可乎。夫爲大釣者。
得鮰魚爲小釣者。守鮓鮓其於得大魚。
難矣。飾小說以醒蒙昧。其於大達亦難。
矣。今見子頭髮種種。營衛且衰。益非著
述之勞。歟。予曰。然有其事物之嗜欲。不
一。鮰雖難得。貪以死餌。士雖懷道。貪以
死祿。不亦悲哉。是故善釣者必細其綸。
芳其餌。而引魚于千仞之下。若以直針
爲釣。維何魚之能得。由此觀之。好師於
人者。有口無行。猶直針而爲釣也。崇論
眩議。亦無裨益名教解也。固陋非有用
之器。自知散材。不遊于高擗。管臨硯池。
著書令賣之。萬事無心。與釣翁一般。雖
然不羨磻溪玉璜之祥。嘗獨坐蓬閒。以
觀涿俗長短。經綸以揣情致。於是甘言

爲餌。勸懲爲釣。投竿於江湖者。有年矣。巨口細鱗。集其淵。往來傍觀之人。愛其魚。相樂而不去。心在灌瀆。則無風波之患。日爲引。鱗鯉不與人爭利。一釣一得。以畜數口耳。簑笠之外。又無餘樂。其樂乃以延年。何疲勞之有乎。物之嗜欲。不客則以此爲患。苦解則以此爲嬉樂。冰炭不合。皮此異其趣。是以不得聽命也。客喟然嘆曰。昔者聖人以道德爲竿。綸以仁義爲釣。餌投之。天地閒。則萬物其有也。子亦知而言之乎。予笑而不應。客去。將序於是。編卽陳此事。顏于簡端。文化十三年立冬後一日。

簑笠漁隱識



月... 編卷一

朝夷巡嶋記全傳初輯第二編總目錄

第十一條

射向鳥證據

樹間隱返命

第十二條

卜繕葺夜醮

黑白谷地葺

第十三條

過去來會話

巖堰水煩禁

第十四條

紉柳廿廿井

岳神地藏會

第十五條

戮惡劍山麓

慶善百田宿

第十六條

迎旭汀友鶴

吟風溪觸體

第十七條

磨出礪竝月

占夢黑川堂

第十八條

苗頃時濁水

客去鴈春霜

第十九條

野干玉罩燈

蘇彌染袖巾

第二十條

網總袴游偵

假裝束情郎

此編以十卷二十條為初輯二十條以下為中輯續像陸續刊行焉其十條以上見初編第一卷續像右

聚噪斜
陽外
群飛暮
雨中

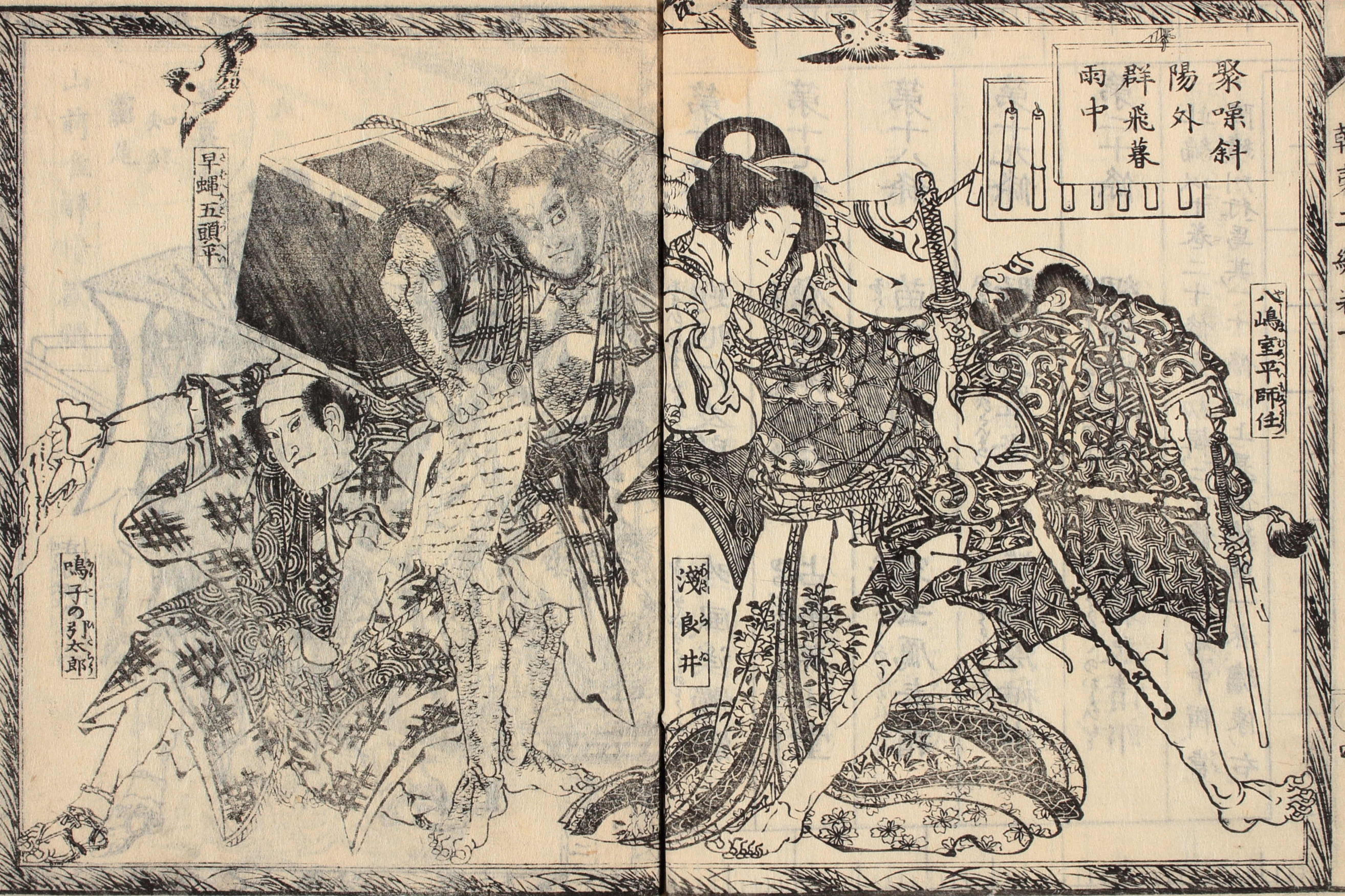
八嶋室平師住

淺良井

鳴子の引太郎

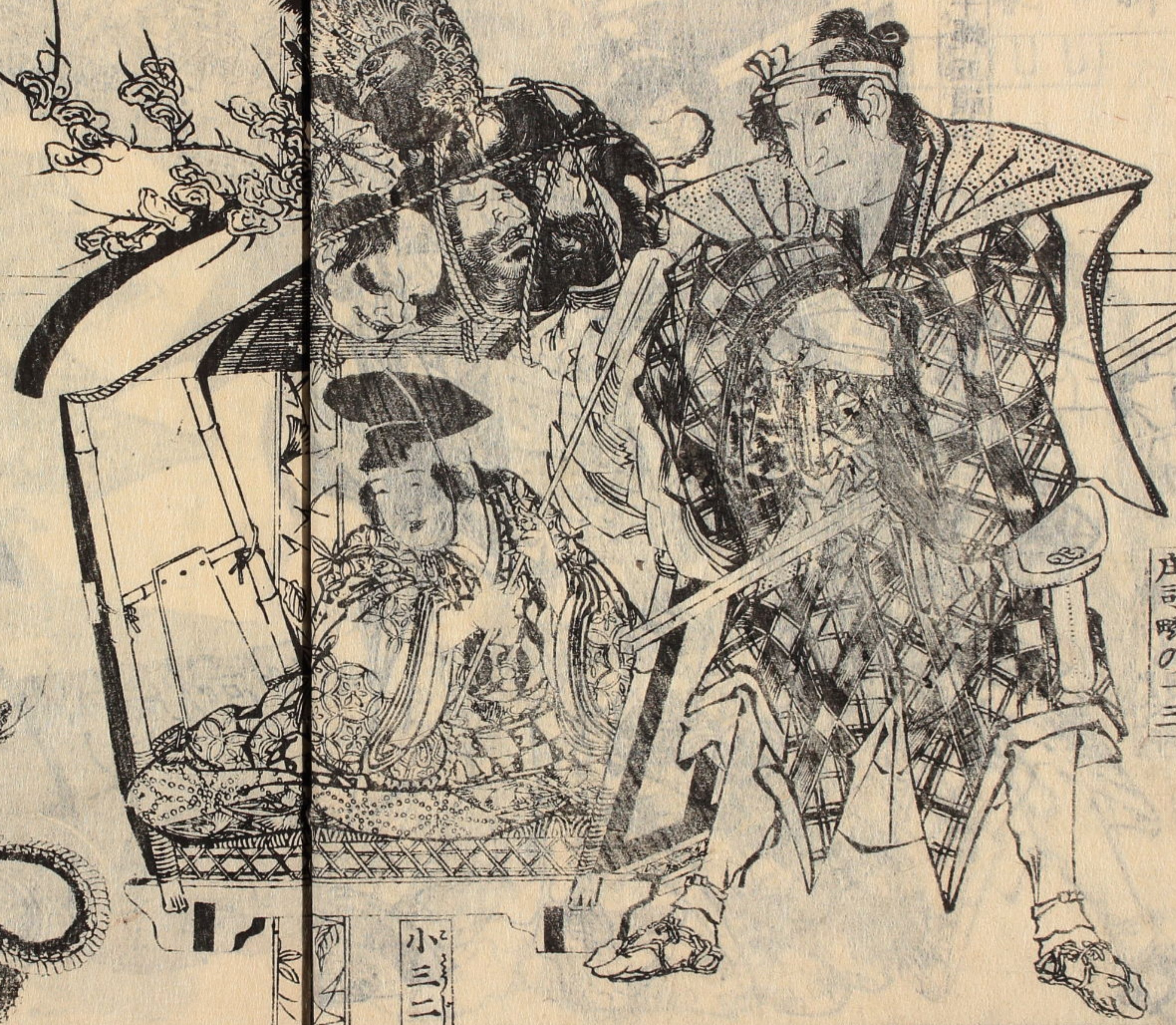
早蠅五頭平

月夜二篇巻一



草裏不知終
露尾
山前唯解暗藏頭

繪向判五



庄司殿の二三

小三

岡田冠者親義



一生富貴
皆空夢
千古英
雄只斷碑

巴の庵



余嘗思ふ大約坊間印行の草紙物語は五ヶの訛謬ありと他一草帝を
 かくおたつてごうへをりてこれを數人毎編倉卒の間は成る稿を易る暇あぜ
 一段稿了らまば一段備書に附屬一卷浄書すれば一卷素人は流しと彼我
 との互にを貪りて速なる人ぞ致さる故に作者といへども坐して誤る作者ま
 謬て備書画工謬る書画謬る素人又謬る素人又謬るといへども書肆も亦復
 改む疎多しゆまごとの失を補ひ得せしめてやどて製本誤販を於是閨人
 推蒙競うてを閱ちるを句讀を批て語勢を失ひ文義を謬る
 り稀これとを著編の五謬とをいひける就中この書は前板素人の
 刀をもて成るもの多し或は圈点傍列を削去り或は真名を削去り
 補ふは假字を以て。菰紫琴を筑紫と。多えをへし。ひねをいし。を
 しとしををいし。よりづをよむと。わしを美まひて違はれどもあはよおの

假字。一は下つくの假字をいへも亦これと同く彫刺かくの如く恐るるを
 辟ハ蠅頭塗鴉の如し作者といへば読むざるを有る。書肆はこれを驚かされ
 為よその拙を補ひ削成へるところを修復せんとするは比較は稿本を
 獲らざるを彼此あましく感ふ遂よをひつをせし。あめきをあにごとし。
 痛しむをいへばたとするは類抄に。あまし。ハ作者意外の失り古人
 魯魚鳥馬の嘆あり。經傳方書といひていへども。誤行を犯すをほむ。
 況んや燈下の戯墨鑿空無根の書しかつて自との謬を論ずるはなほ
 彼も一時これ亦一時之苟の文場は遊戯もその悞脱錯字をん信
 知して改るよりあてて。江湖上は弄賣せば。いとも愧へたり。いや余
 この淺をりて書肆は示して再四書肆余が言を理ありとて。教諭を
 素人は侍の素人慚愧して刀を竊む此度ハもろく工を擇むといは彼我力を

月夜二編卷一

教もろと死ハ判字と死の如く初。往本とあり。人ハ賢と不肖と。
不肖ハ不肖也。賢ハ賢也。一技ハ巧と拙とあり。よくその心を用ひて死ハ拙也。巧ハ捷とあり。
抑余が拙とあり。世の者官ハ棄られ。ハ用心かくの如く。七固く愚と守ハ。
益京撰ハ若王多ク。書肆ハ梓を載る。不富て製本ハ精妙之唯余が著編。毎歳
秋後ハ俄頃ハ研を致く。ともて判刻の日久ク。びやくと多く。謬ヲ此致。支風葉の
喻ハ感して五謬と辨して自笑と云ふ。

蓑笠漁隱再識

家傳神女湯 一包代百銅

婦人猪病の良劑 第一産前後ちの道
即功あり 功能詳ハ此書の初篇ハ載り

婦人つ死虫の妙藥 一包代百銅 半包三三銅

用ハ極めて

精製奇應丸

大包代銀葉 中包代壹葉 小包代五分 但ち一賣不仕也
茶種をもち製方を精細をしむる功尤神妙也

製藥并弘所

江戸飯田町中坂下 南側四方みま店の向

瀧澤氏精製衣



朝夷巡嶋記全傳 第二編 卷之一

東都 曲亭主人編輯

初輯 第十一

射向の鳥の證據 樹間隠れ返命

建仁元年辛酉春三月。朝夷三郎義秀ハ大石山の獵倉。刀野時夏が獵箭。
編せる野雞を夫庭ハ射し落し。架が誇ると。咄禁めて。滋藤の弓挾。
樹蔭より出。彼ハ。彼ハ。衆皆呆。目と注。忽地。奥。
當下義秀ハ彼主従を佖と。近。進。食。
弓を夏哩と捨。時夏義邦より對。恭。膝。目。
志。義邦ハ遠。礼を返。懇。その名を向。程。時夏。
面火の如く。衝。杖突。義秀。且。睨視。声。和主。

しのぎのるまじぶ。射くをせし野雞を棄ひとらん謀るや。あはるる
 鳥惜じよわ。後獵箭は漆して平くつら名と写てあり然るを横書せし
 くの當坐の恥辱後日の批判ひもく脱え死。わくても和主は證やある。
 ぬらむとひら弓矢八幡をええと去せど。敦圉迫らうと捨刀の鞘はもを
 ぢま。義邦吐嗟と推禁ぬ。短慮あり刀野生旅ゆ人とおぼへた。その名も
 向て撃果さ。後悔其処よ。ゆる人か賊心あふ野雞を棄ひ
 落した。棄ひとせも走らん。林ゆら弓矢の古実戦場の相替あつる
 争ひあつとぞ。その故。といふく。且某は任せぬと和譚て義秀よ
 うら對ひ何國の人と知せと。言來介も似されども。吹るぞく黙せし。
 一隻の野雞は二人のぬ。つれと定るも鳥小をうる箭よ。つれとや
 平に證ある。介る野雞を射すといふ和殿も又證據ありある。昔て

疑惑と散さ。抑和殿の何処より。何の郷赴くと。弓箭樵夫。只
 ひらの。樵夫が外へ途もな。山と踰る。女ん。姓名詳し。聞せし。名告
 ぬと真成。向きて。義秀莞介と。うら笑。うら。所ある。あ。その端と
 復き。今更。向て。告。某原の安房國大瀨の浮浪人朝夷郎
 義秀といふ。故あり。故郷を。去。歳より下總の許我。をり。
 當國の學校。留學の志願あれば。師の紹ぬ。仕。ある人。を訪んと。
 けや。の。地。來。著。い。ゆ。れ。山。獵。倉。や。吹。え。其。処。よ
 望。と。失。ひ。春。の。日。影。の。あ。ほ。高。く。羽。と。契。る。も。待。不。樂。し。ひ。く。彼。処。
 赴。て。對。面。せ。ぬ。と。思。ふ。熟。ぬ。山。路。を。辛。く。ゆ。て。芝。生。よ。弓。箭。の。り。
 楚。人。が。送。ま。し。故。事。も。有。敷。糸。よ。ひ。ゆ。れ。と。過。ぐ。取。あ。は。は。す。
 その。箭。は。漆。と。時。夏。と。写。し。う。原。來。彼。方。さ。の。邊。ら。は。そ。の。ん。ぢ。ん。

これをもて推量する。相去ると遠くあり。これも鳥され獸され。いづや
 射りて見来の牽出物よとぞ。これとぞとぞ。登り来る。樹暗茂
 向上の倍羅摩野雞の声高く。さうさうさうさう。引渡せ。行む鳥の叢の中
 撒きまれば樹蔭とさうさう。矢下り。さう引渡せ。行む鳥の叢の中
 落ちたり。さうさう。彼射り。誇り。某も又良し。衆
 とく大人氣も。も。禁。と。時夏冷笑。口は。調敷。證と
 されて。拾ひ。と。さう。證人。と。出せ。と。遍撒。の
 人。の。胡亂の争ひ。以堪。證人。と。出せ。と。遍撒。の
 義秀。ち。此も。騷。原來和君。の。矢。未。熟。に
 證人を。野雞。の。箭。と。鐵。の。胃。各。位。の
 鳥。と。射。の。正。の。項。へ。出。ん。

某へ彼知ら。向ひ。射。落。射。向の箭。を。正。に。證。据。を
 否。和君の箭。が。過。り。又。鳥。は。貫。つ。け。り。皆
 中。に。射。れ。ゆ。争。ひ。の。時。夏。も。それ。と。さう
 一。句。も。出。せ。口。と。喝。て。眼。を。睜。り。三。歩。さ。り。後。方。の
 時。夏。が。私。卒。井。平。の。苦。い。げ。身。を。辟。り。列。卒。の。目。と。は。袖。と。振。き
 堪。ぬ。笑。ひ。と。咳。た。ふ。紛。々。つ。い。わ。り。義。邦。愧。さ。り。芝。折。敷。て
 片。膝。と。著。て。さ。ぞ。嘆。息。一。面。目。も。三。郎。の。吾。們。武。弁。の。家。は。先。て
 不。覺。の。争。ひ。及。ぶ。若。輩。の。一。と。ら。ぶ。併。寒。郷。人。と。は。良。師。不
 遇。之。弓。箭。は。煨。煉。せ。れ。只。田。舎。兒。の。頑。置。ゆ。多。と。必。ひ。捨。て。許。容。あ。ら
 和。哉。い。某。さ。う。面。と。か。と。心。地。と。秋。び。と。ま。る。の。多。と。と。可。憐。と
 幼。解。ら。む。義。秀。も。又。貌。を。改。め。分。過。り。和。君。の。和。論。痛。入。り。ん。

いぢ
射向を辨
よむ
とく義秀
とらふ
時夏を脱破
と



ほの平

時まつ

よらふ

廣みの

とらふ

某とては村落よ人とありていへば鎌倉様の風流への武藝を嗜むといふも古実をいふと鮮しきなり。余も況やんや。人力遊山を妨げし身の樂もよきもわづら不憶弓箭を獲つれば訪ふ人に見来の牽出物欲得とあひつ。とて將雅氣の僻事なりたされ。武藝未熟ある某射く落さし野雞が不幸に似れども原その弓箭のよはゆ多しあくやぐ武器と擇むふゆの本事のよはゆ射外ぬふの千慮の二失とて某が愆の功名は定られ。執疑を散らふは寔にあはる幸あり。あんと抗をみひねと謙すつ却人と敗るぬ大丈夫の器量とてと義邦のいよく感とて慰む既斯う鮮と隔あはるなな次何人と訪んとて途の疲勞と厭はる高峯を登りぬひ。その名は竹といふのぞと向て義秀も點頭某が訪ふ人

中ふそとらきめそと先より云と出く向べくあひ。是は不慮のいよとて言を違あらざりた吉見冠者と呼れぬふ和君とてあや。それら尋る人といふを義邦のあや某則吉見の郷士源義邦や。これ安房も下總も相識のいあらざる。いふ一とら名とてや和殿とあられけん。あひひるた幸に紹女の書状が賜てと疑ひの鮮ぬも。こととて義秀の懐中する置紙より一通とて出。其武徳の師たり。健田秀作老人の尺牘に當國學校の学頭とてとや。均長老の舊友なれば一通と寄せるは不幸めく長老の三年已前は世のよう。学校もくちめく笑つ事と失ふのさあ。久進退其処も笑りて。又いよともとをたご切く彼長老の由縁のいれあはる。あはしめと。請問しあはる人答く。いふと。只今の学頭の真言密宗の碩学也。

理真人と云々人もの多き子に也。然るも均長老の身子あらば流由縁もなり。
 字吉見との地方の冠者義邦との人一人も均長老の身子より舊縁も
 大かざるを然れ其心もゆく向くと誨らざるは悪くと。吉見は赴た又
 こひ山路を投て推しあせり。長老は化志ぬひてこの一通と誰ゆえせん。
 幸ゆくと棄らればむ。鰻魚鰻江河入り。病雀搏と黄花を衝むればも
 ほくくゆいんと速記して給ひの一通をうよと。義邦は飲茶と封と披を
 讀へ。繰返しく巻收め某齡ははゆく。富のありもあらざるは。賢才を
 扶持せん。相応ぬ所行なれども均長老をあつてよ。はかせし人を
 苗ぐらんや。後僕よ案内ををせらん。吉見の宿所赴たぬ。某は獵前を
 納めく。跡よりてと。吁嚟ふ。後方より。江三廣光さるん。はり。
 緯ののろをぬせんと。と。ふん氣色は廣光のまのほり。入進る。時夏

退たて。床几は尻をうらうけく。もと又た頭を低。又ゆきものなるじり。
 今この件の向答を。受けけ。床几を。とら。處く廣光を推。て。進。と
 出氣と。と。柔。け。恭。き。義。秀。さ。う。ら。對。ひ。面。目。の。や。總。の。客。人。某。は。前。と
 ら。よ。と。と。わ。が。う。射。向。の。鳥。は。あ。ら。の。つ。は。過。言。の。罪。の。任。地。を。昇。り。勸。解。
 ば。其。固。う。り。冠。者。と。同。郷。と。多。く。竹。馬。の。ま。り。數。の。後。も。刀。野。太。郎。
 時。夏。と。鳴。り。め。に。さ。げ。冠。者。と。戲。ま。る。賭。鳥。を。射。んと。約。せ。負。が。う。ろ。の
 怒。ま。れ。ば。賢。慮。ま。掛。ら。れ。と。又。再。会。も。期。と。な。れ。と。野。外。に。鹿。酒。を。酌。ぶ。と。
 直。の。別。と。い。い。選。憾。の。あ。の。鹿。は。上。緒。と。の。賽。法。師。あり。這。奴。釋。門。は。入。
 か。か。肉。を。食。ひ。酒。を。嗜。む。嗚。呼。る。の。の。の。あ。れ。ども。その。性。愚。直。ゆ。と。
 客。と。愛。せ。り。某。年。來。施。主。と。う。と。と。て。夜。食。を。と。ま。れ。ば。冠。者。よ。も
 志。れ。の。の。の。野。雞。と。の。の。且。上。緒。が。庵。の。伴。ひ。不。世。を。勸。め。後。は。

和殿のえいともめも吉見ゆくと相謀らん枉く彼如(と)赴(と)他事
 るく賠(と)詰(と)誘(と)引(と)義邦も亦(と)是(と)を飲(と)び(と)刀野(と)ね(と)瓶(と)を飾(と)る(と)身(と)
 遣(と)客(と)と愛(と)せ(と)り(と)て(と)度(と)ふ(と)所(と)あり(と)必(と)ず(と)推(と)辞(と)の(と)と(と)共(と)侶(と)を(と)勸(と)つ(と)辭(と)を
 竭(と)と(と)親(と)切(と)の(と)義(と)未(と)だ(と)面(と)目(と)身(と)の(と)あ(と)り(と)て(と)聊(と)も(と)推(と)辞(と)を(と)某(と)文(と)武(と)修(と)行(と)の(と)一(と)処
 不住(と)の(と)の(と)る(と)る(と)過(と)世(と)の(と)る(と)契(と)や(と)り(と)け(と)ん(と)兩(と)君(と)遐(と)棄(と)の(と)ど(と)の(と)身(と)不(と)肖(と)よ
 い(と)ども(と)義(と)は(と)仗(と)て(と)死(と)せ(と)る(と)悔(と)や(と)況(と)文(と)を(と)結(と)ん(と)て(と)美(と)酒(と)佳(と)肴(と)を(と)入(と)る(と)よ
 何(と)如(と)せ(と)ども(と)ゆ(と)え(と)ん(と)や(と)し(と)と(と)飲(と)ち(と)愉(と)く(と)諾(と)ひ(と)ら(と)義(と)邦(と)の(と)も(と)う(と)い(と)ふ(と)
 時(と)夏(と)十(と)と(と)飲(と)び(と)て(と)あ(と)り(と)ん(と)ま(と)づ(と)客(と)人(と)を(と)て(と)後(と)僕(と)并(と)平(と)を(と)下(と)膳(と)庵(と)
 送(と)ら(と)せ(と)し(と)ゆ(と)け(と)掃(と)る(と)歡(と)會(と)は(と)野(と)雞(と)の(と)あ(と)り(と)看(と)ら(と)や(と)某(と)の(と)冠(と)者(と)と
 ち(と)よ(と)聖(と)時(と)射(と)獵(と)て(と)彼(と)如(と)は(と)取(と)入(と)え(と)ん(と)思(と)ひ(と)び(と)や(と)と(と)又(と)久(と)し(と)義(と)邦(と)の(と)ら
 ぬ(と)よ(と)の(と)穢(と)寔(と)は(と)あ(と)り(と)ん(と)あ(と)れ(と)和(と)殿(と)の(と)後(と)者(と)達(と)を(と)勞(と)せん(と)よ(と)い(と)ふ(と)ら(と)ぬ(と)

三三を(と)と(と)の(と)せ(と)も(と)果(と)じ(と)時(と)夏(と)頭(と)を(と)ら(と)掉(と)く(と)和(と)殿(と)の(と)後(と)者(と)を(と)き(と)ま(と)す(と)
 の(と)彼(と)上(と)膳(と)の(と)某(と)が(と)恩(と)顧(と)の(と)れ(と)を(と)い(と)へ(と)他(と)一人(と)を(と)任(と)せ(と)し(と)を(と)れ(と)并(と)平(と)と
 呼(と)ぶ(と)時(と)夏(と)が(と)後(と)者(と)媼(と)子(と)并(と)平(と)享(と)年(と)あ(と)り(と)世(と)二(と)歳(と)面(と)白(と)眉(と)秀(と)く(と)人(と)品(と)
 骨(と)相(と)懸(と)く(と)淺(と)餘(と)の(と)身(と)甲(と)小(と)品(と)草(と)の(と)擘(と)を(と)臈(と)縛(と)き(と)し(と)精(と)悍(と)は(と)打(と)拵(と)
 る(と)が(と)阿(と)と(と)忘(と)つ(と)處(と)く(と)主(と)の(と)わ(と)り(と)又(と)跪(と)坐(と)く(と)時(と)夏(と)を(と)結(と)と(と)る(と)汝(と)の(と)
 客(と)人(と)を(と)下(と)膳(と)庵(と)へ(と)案内(と)せ(と)し(と)山路(と)を(と)ゆ(と)鬼(と)魅(と)猛(と)獸(と)の(と)患(と)を(と)い(と)ひ(と)て(と)る(と)
 弓(と)箭(と)と(と)推(と)ら(と)し(と)哩(と)愆(と)を(と)射(と)て(と)落(と)せ(と)り(と)臆(と)と(と)不(と)覺(と)を(と)と(と)ん(と)汝(と)が(と)越(と)度(と)の(と)
 る(と)び(と)禍(と)ら(と)身(と)に(と)及(と)び(と)ん(と)あ(と)り(と)る(と)や(と)目(と)を(と)論(と)し(と)て(と)る(と)汝(と)が(と)越(と)度(と)の(と)
 あ(と)び(と)く(と)處(と)を(と)受(と)けて(と)扱(と)御(と)ら(と)る(と)を(と)い(と)ひ(と)る(と)途(と)に(と)て(と)殺(と)せ(と)る(と)の(と)
 則(と)主(と)君(と)の(と)怨(と)敵(と)あり(と)鬼(と)神(と)の(と)あ(と)り(と)の(と)あ(と)り(と)も(と)い(と)ふ(と)汝(と)が(と)越(と)度(と)の(と)
 と(と)い(と)ふ(と)時(と)夏(と)荒(と)命(と)を(と)笑(と)み(と)れ(と)ぬ(と)か(と)ら(と)ぬ(と)ら(と)ぬ(と)ら(と)ぬ(と)ら(と)ぬ(と)ら(と)ぬ(と)ら(と)ぬ(と)ら(と)ぬ(と)

井平の義秀よまてと對ひて額をつたかん郷導信ん誘ふとて先
 立義秀をを愛ひて。義邦時夏は辞別を抹鹿をささゆく後井平の
 弓をりて道も草と拂つ杖もさへは餘町や二十町中ぬんこと
 比忽地よ左在て義秀よまて對ひて外より十徳庵へ路一條ありて
 かん某の身の暇をあり。主は従ひて程もよく復見よまてに
 まわん牙が射藝俊才一發一言よあられとよく感て微軀魯
 鈍俗眼ととども既よ氣傑あるとととあれといふ人の言葉又交淺くと
 言深たりの愚之身賤くと貴きと祀とりの惑ひと信とれとて
 諫るもの識るとそのゆれ人よあつて宜うさる所おそれ慎むと
 なるもの止んはあつて心つたな所おゆくと罪を英士は贖ふ時
 たり。あまて不肖を顧む。微生が信よ倣ふもの。夫良禽ハ樹を擇む明
 君ハ臣を擇む今の世ハ臣も亦宜く君を擇べし。いふせん某ハ不幸よと良
 主よは遇むあまてとく苟もその禄を食りの善惡よ就き邪正よ就き
 主命惟聽さんやそれ違ハ身と亡との捷徑を用くよ似たり。え勇も
 ぐん智も亦及るとあり。人を識るものハ不慮の仇あり身を衛るものハ
 危きよむつとどとのゆへ猛た獣又悍き鴉まあり。又をりて山賊出某と
 弓箭をとり。かん身ありよむとみづくも御宗だかさんえんは
 のとと速乾と嘆息と。義秀つくととちまてととと小膝を礎と拍吁
 見買あつて媪子生。れ金玉の高論を惜べし。か才子を御士の奴僕とて
 正造化の神の僻事なるん。いつ所悉そのちをるをいそ某り當
 國り入く留るとあふ必一言の信よ酌ん買あつてと感嘆とと
 別るよ忍びぬと井平も又嗟嘆と。今ハも時夏がとて待むん

一膳庵の前面の段より。遙よりある森のころと大竹藪を背より。茶室の
 しく鄰家のひびく。其処よりあつたぬ。隠れあつたゆふの急なと指す。
 叮嚀又後示す。義秀考へてち点以らば和殿を勞し。退るも西君は
 結する。と申すた。ゆふどをさといひく。彼草庵とまう。井平は
 舊の路へ帰ると見え。估とえく。猛らう箭の程なく。満月の如く
 弯なり。窳固ゆく。驛と射る。弦音とらう共。義秀と身と論と壁は
 鶴前の頂と幽搦をう。四丈あす。前回箭と松の幹へ揺揚をまら
 ける。程もあつて。射掛る。二の箭を。義秀右の袂に受と。あつ。抜棄し。も
 以ら。愀然と。後影を。井平。霎時目送り。吁と二声。嘆賞。合する。
 弓ととり直し。獵場のへ還りけり。さ。程より。野太郎時夏。御高ま
 美邦水は。憚り。機密と。井平。又示す。及。渠。る。意中と。察せり。款
 づ。小志。と。想像の。ま。心り。ころ。多れば。担。假托。衆人を
 離。鹿の。五六町。漫走。する。程。井平。弓と。引。提。て。遠。登。り。ま。ま
 け。夏。時。夏。は。と。抗。て。遠。く。キ。折。た。れ。を。遅。し。と。樹の。蔭。へ。召。入。れ。と。く
 声。を。潜。し。嚮。ま。視。目。が。多。れ。ば。明。地。ま。い。り。ま。る。被。す。謎。を。何。と。解。す。
 素。浪。人。奴。の。い。ま。と。や。と。向。井。平。さ。の。朝。夷。を。送。れ。と。く。弓。箭。を。あ。の。の。ま。ら。び。
 丸。辞。の。端。大。く。推。量。し。く。の。の。を。彼。奴。を。射。く。落。し。主。君。の。恥。を。雪。え
 と。あ。の。の。く。ら。色。も。え。せ。ん。緑。阪。ま。く。別。を。告。遣。と。過。し。ま。り。と。只
 一。箭。を。と。ま。す。似。む。射。損。した。心。忙。と。獲。つ。二。の。箭。も。身。ま。ら。ぶ。ま。の。僅。ま
 袂。を。縫。留。り。せ。れ。ども。朝。夷。へ。騒。ぎ。さ。る。氣。色。も。な。く。徐。々。の。箭。を。扱
 棄。し。え。う。へ。の。も。ま。ら。阪。を。さ。り。ぬ。某。既。二。條。の。鶴。箭。を。他。失。ひ。つ。愁。ま
 大。口。數。え。る。も。あ。ら。う。づ。も。い。り。び。追。殺。め。れ。ぬ。を。幸。あ。ら。う。づ。い。ひ。ひ。た。

彼人の勇敢武藝。當今を襲とのべき欲もを吐け。疾を求へる。御あつを
 轉し。只信をのぞかん。和睦のつと。と諫れ。時夏。安く大息。吻は。原来。彼朝夷
 奴の。言の。よ。や。み。辭者。なり。汝が。諫言。その。扱。あれ。が。由。今。さ。う。友。垣。結。り。
 され。又。彼。奴。に。殺。され。らん。然。と。し。林。鹿。の。會。せ。む。の。憶。あ。ら。う。と。思。へ。ん。世。殘
 究。め。難。き。あり。の。ふ。せ。ま。う。と。頼。を。掛。し。困。り。果。つ。る。主。の。頼。を。ほ。つ。と。う。ち
 熟。視。す。と。お。ぼ。し。る。い。る。某。一。の。計。め。で。箇。様。と。よ。宜。い。て。酒。宴。の。席。ま。て
 某。を。さ。り。撃。つ。よ。せ。ん。と。敦。圜。の。る。人。の。諫。を。救。へ。べ。い。當。下。君。の。怒。と。鎮。め。て
 某。と。遠。離。な。る。朝。夷。の。る。ぶ。お。の。り。あ。ら。ん。と。れ。を。射。つ。る。井。平。が。か。ひ。ら。の
 所。み。は。し。と。主。命。の。あ。ら。づ。り。た。と。その。疑。ひ。を。解。と。死。は。お。の。の。後。暗。く。い
 かく。彼。壯。士。の。信。を。の。ぞ。く。文。り。あ。ら。う。よ。れ。背。盾。あ。ら。ぶ。れ。の。幾。い。う。と
 先。実。が。ら。く。密。詰。の。ら。点。頭。の。計。究。の。妙。を。さ。ら。や。が。ら。汝。頼。は。朝。夷

敢。武。藝。を。稱。賛。と。れ。も。これ。何。と。も。あ。ら。ぬ。真。実。は。和。睦。の。事。ハ
 今。ら。り。て。議。と。ぐ。ん。當。座。の。難。美。を。脱。と。ん。よ。の。計。略。よ。り。の。の
 は。假。し。汝。を。勘。當。し。と。吉。見。冠。者。の。預。べ。且。く。彼。奴。の。身。を。寓。と。
 兄。ま。つ。た。笑。く。と。就。竊。よ。と。る。へ。報。知。せ。よ。と。れ。又。後。日。と。較。計。あ。り。
 勢。漏。と。る。と。早。と。は。示。め。と。馳。く。樹。蔭。を。立。止。む。日。ハ。西。山。小。傾。江。ぬ。浩。怒。
 長。那。の。野。が。列。卒。と。う。後。僕。廣。光。本。を。將。く。彼。此。と。時。夏。伐。事。を。終。つ。
 端。を。く。う。と。裏。合。は。ら。う。時。夏。遙。く。を。見。と。呵。と。う。ち。笑。ひ。吉。見。生
 吉。見。生。井。平。の。人。を。遣。り。届。と。今。還。り。ぬ。と。も。わ。く。も。獲。や。は。な。す。ト。信
 庵。退。り。あ。ん。誘。め。と。う。ち。う。れ。ハ。義。邦。由。笑。ま。ら。る。遠。去。く。その。ほ。う。ふ。互。あ。り
 何。と。も。い。は。ぶ。え。の。あ。ら。ぬ。山。中。あ。ら。う。ち。も。あ。ら。う。と。ど。そ。ら。一。遍。を。ら。ん。た。り。
 義。秀。の。結。ん。と。誘。と。の。い。う。け。と。井。平。を。寄。ひ。つ。時。夏。と。推。並。ひ。と。麓。の。庵。へ

赴くまぞ江三と井平のあつきの後又眼き後ろ列卒をのそがして衆皆
山をぐるまのべ。

初輯第十二
ト繕庵の夜醮
黒白谷地

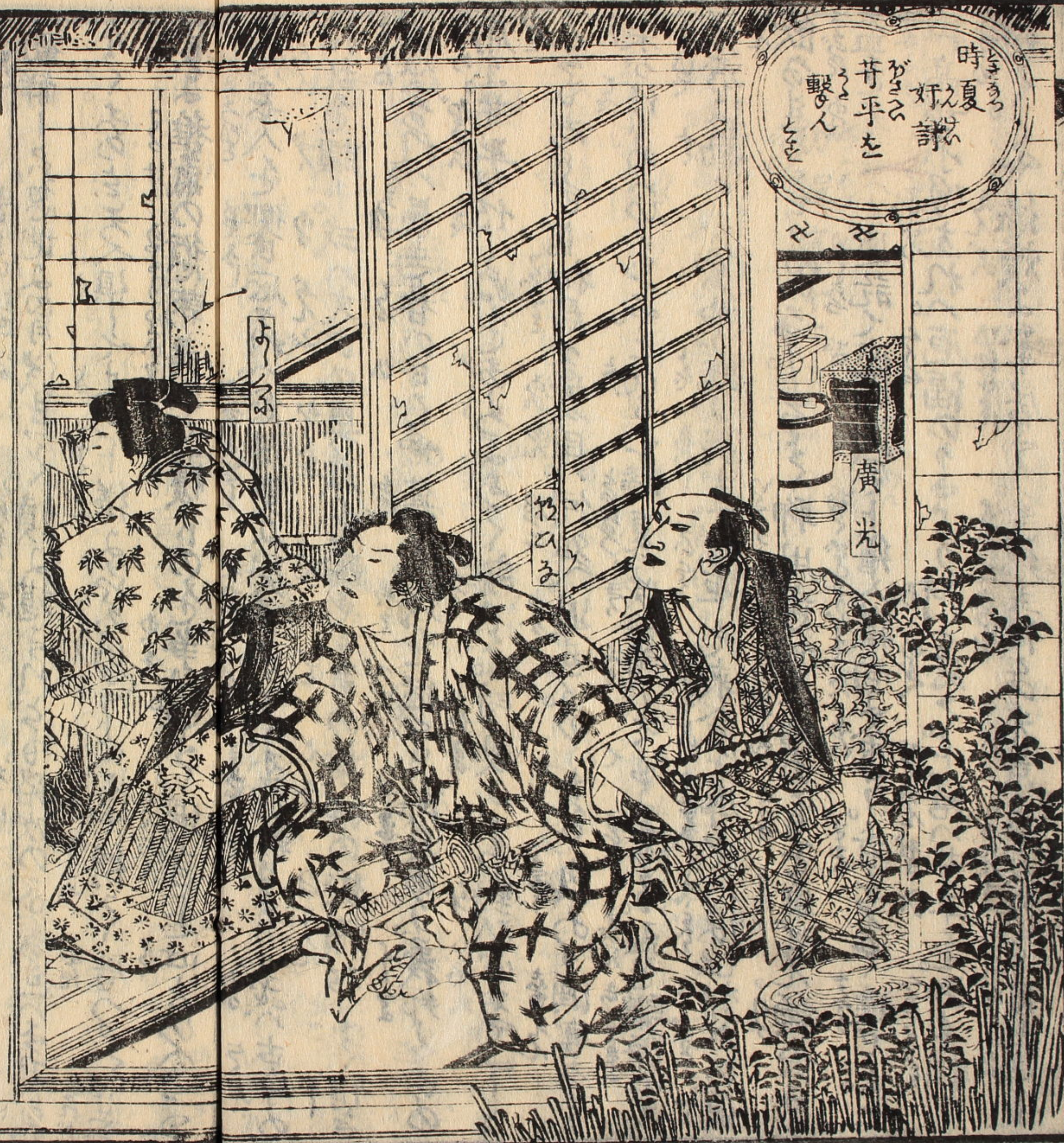
却説時夏義邦ト繕庵ふまよけれはぐり列卒又暇をとせて魚守
つららののの消息を言ふそ宿所へ入る茂秀ハ菴主の僧ト繕共侶出迎
衆皆子舎又取合はどよ時夏ハ会釋もせ上座又毎と坐し茂邦ハ
その次又をり茂秀をたれ對ひて實の座又著し江廣光ハ癩なる
偏提を披死盃をそと先賓主で後ちらとけり物語いと奥ありさる繕は
ト繕ハ遠く庖福入りて圓頂より拭の笛を掛方宿し糾芋の袴
結めけり獲りの鳥を庖丁ト菜園の昔菘竹林の春竹種々の料理

あて衆人を御食応れへ愈殊更又笑坪又入り不の數りあり或ハ古今の
治乱を譚り或ハ文武の奥義を論り毒の菓種の綾錦はさく惜き
團坐ありハ長き春の日と暮之燭を継ぐも餘奥あり義邦とあ
席ハ井平がけりぬをあらよあてり時夏も對ひ覺あてり
人ものあせり和君が愛臣ハ何処へ退るゆきと奥ある酒宴ある
渠がけりぬいひとやと向ると時夏ハの態とては合る盃を醜淨や
茂秀又勸めいひぬ既に英士は邂逅と来会を辱せ只恨む郊外の夜
飲あまふとてあつきのあつき聊用意せ一種の肴と進せん願ふらの
盃を舉ぐと述訖座又入りト繕入道向し命せ肴をそ進せよと
声高ゆるめをれハ庖福のうらり阿と応りト繕ハ井平を蜘蛛掛
縛くも縁頼は牽居り茂邦主後との光景又呆惑ひく目を注し



時夏

平



よ

ね

時夏
好久
詩
平
撃
人

廣光

且くハ辭をささぐ。秀秀ハ黙然と立ち熟視する。後時夏ハ美邦ハ
 許し。又といひあむ。口を引。搦衝と互。縁頼。又跳り出。カの提緒を縁。
 締び。野袴の稜。頼。井平と信。と睨視。そ。背後。又。う。う。
 後秀。う。ら。對。朝夷。生。あ。つ。や。この者。ハ。時。夏。が。東。道。の。寸。志。な。り。と。
 かり。ま。の。吉。見。ぬ。緋。の。あ。ろ。と。ゆ。り。こ。め。る。一。晝。は。某。此。奴。也。と。く。
 客人を送。う。さ。う。う。箭。を。預。遣。せ。し。猛。獸。毒。蛇。を。防。は。る。る。え。り。と。さ。つ。て。ぞ。
 を。さん。か。ま。此。奴。が。生。才。學。の。主。の。恥。を。雪。ん。と。て。縁。段。より。互。別。は。獵。箭。三。條。
 射。け。し。か。ど。も。幸。う。と。く。客人。を。傷。ら。せ。阿。容。と。く。と。入。り。ま。つ。云。云。と。告。ぐ。
 勸。解。し。の。忽。地。は。凶。月。淡。き。と。憤。は。堪。が。れ。ど。も。路。次。の。ゆ。め。お。ど。ろ。さ。り。て。氣。
 なく。あ。の。と。ろ。入。俱。と。て。あ。つ。ト。繕。よ。さ。る。ゆ。う。と。と。や。傳。と。厝。つ。と。某。
 實。ハ。推。氣。の。術。朝。夷。生。と。獲。り。の。を。争。ひ。ゆ。く。過。言。を。吐。と。り。と。も。

先那を悔て露をる。も宿意を送とよめた。執念深此奴が僻事
 しく。泥塗され。一。口。面。を。つ。つ。ふ。り。を。れ。へ。向。べ。た。腹。立。と。も。朽。を。う。ら。も。言。業。
 少。の。述。彈。き。で。一。せ。あ。く。今。眼。前。并。平。が。頭。を。刎。く。朋友。の。信。を。表。せ。ん。と。
 者。ハ。不。血。を。め。ら。じ。ぬ。と。い。ひ。あ。へ。と。め。を。是。り。と。引。抜。て。執。念。せ。ゆ。と。振。揚。
 吐。嗟。と。騒。ぐ。美。邦。主。後。起。ん。と。と。れ。ハ。美。秀。ハ。い。ち。そ。や。ま。り。鬼。て。時。夏。を。
 推。禁。め。さ。よ。ま。ら。う。人。君。が。誠。心。三。言。ゆ。く。至。り。盡。せ。り。某。が。所。望。の。者。ハ。
 御。家。臣。の。越。度。を。宥。め。く。の。席。は。侍。し。ぬ。を。れ。ハ。過。る。糧。食。心。平。一。晝。裏。の。ハ。
 お。な。さ。る。途。中。前。箭。は。秋。を。縫。れ。れ。ど。も。御。家。臣。が。へ。こ。も。り。小。鳥。を。
 射。ん。と。さ。ら。ぬ。は。巻。ね。ひ。化。箭。よ。と。と。ひ。は。ひ。と。ば。あ。ら。う。い。は。酒。宴。の。興。
 その。ゆ。め。と。や。う。ら。忘。れ。く。ひ。ひ。た。が。や。あ。の。杜。伎。が。某。を。射。れ。ば。と。一。浅。夷。
 負。し。の。か。も。あ。ら。ぬ。と。又。主。命。を。稟。せ。と。も。主。の。あ。ら。ぬ。怨。を。復。さ。是。則。忠。臣。ハ。

某浅智短才るれども忠義の人を殺は忍びびど。而降く壤固く人推く
 更に憑しめくも懲一戒百又某を何とぞ志き。枉て刃を納めと辭茂
 娼しく禁じ。茂邦も亦廣光も共その前より。後より。辭齊一諫付
 中。三郎既に惻隱の心あり。怨を是れ仇に報り。信をりて渠を。禮美と
 述く。乃に救り。現實主團坐しく。歎びを盡す。折人罪を。さへり。あろし
 きよ。あろし。茂邦不肖なるとも。和殿の乃に井平を。教訓し。て。び。懲
 め。せ。ト。あろし。の。又。他。事。も。あ。く。ゆ。と。和。諭。ら。れ。る。言。葉。小。携。る。井。平。を。悲
 しげに。冠者の君救せ。菴主の出家の。る。る。の。傳。る。と。も。又。三。郎。小。勸。解。り。や
 ぞん。と。あ。ろ。し。似。ぬ。と。ぞ。の。と。る。あ。ろ。し。小。苛。刻。と。怨。む。れ。バ。ト。経。ハ。か。ろ。く
 進。出。醫。師。ハ。人。を。活。せ。る。も。人。病。を。治。す。醫。師。ハ。富。貴。を。得。家。ハ。殺。生。せ。ら。れ。た。
 多く死後。あ。れ。肥。せ。と。目。を。垂。迹。本。地。と。い。ふ。法。衣。の。袖。に。被。り。り。と。え。
 入道。を。ど。ぞ。分。際。と。及。ぬ。り。と。ぞ。の。推。黙。り。と。い。ひ。り。と。ぞ。や。出。て。も。え
 比。多。ん。諸。君。辭。を。彈。志。も。い。ふ。な。り。救。を。め。り。げ。ハ。我。意。も。慕。せ。ら。れ。る。あ。ろ。し。
 御。許。客。願。ひ。も。と。蟬。声。を。く。口。説。け。り。時。日。ハ。喪。人。ハ。悲。を。乞。せ。と。ぞ。あ。ろ。し。
 刃。を。整。し。納。め。つ。足。を。蹴。揚。ぐ。井。平。を。縁。頼。り。鶴。落。し。命。を。真。加。あ。る
 奴。り。三。郎。冠。者。の。面。は。觀。む。の。刃。ハ。鮮。ら。く。只。キ。ハ。止。ん。今。日。より。勘。當。ぞ。と
 罵。り。懲。り。と。茂。邦。も。う。ら。對。ひ。彼。奴。ハ。原。鎌。倉。の。親。族。も。り。あ。つ。る。ふ。り。
 追。又。え。と。い。へ。る。も。そ。れ。將。事。を。選。ぶ。似。く。いと。執。ね。り。と。い。は。る。ん。具。く
 彼。奴。を。貴。宅。に。関。人。恨。を。改。め。く。ハ。教。訓。と。賜。ら。ん。や。と。い。ハ。茂。邦。大。な
 歎。び。を。願。し。死。り。よ。る。ん。廣。光。ホ。と。相。謀。り。風。諫。を。加。る。主。の。み。み。の。よ
 役。よ。え。べき。仕。使。り。り。茂。邦。預。り。な。り。ぬ。舊。の。席。に。著。ぬ。と。勸。め。聴。て
 廣。光。ハ。井。平。が。傳。を。解。せ。て。危。偏。に。退。を。實。主。齊。一。席。より。へ。り。と。又

盃をせめてぐさ之後又受秀敷盃を強られく。我邦も譲る物多。冠者
 素より酒を嗜む。盃を受つても困どくせんともなげあると時夏ら
 えと冷笑ひ吉見ゆ。苦く其助くまわさへ。向ま其心を用ひく。客
 人又着せり。和殿も着志あるといれと幾邦ら微笑を勿論のこへ。何を
 ぐる。と助を揚て折敷の内を引もそれの時夏言は推禁め其一種の所望
 のこの着をせぬ。和殿も代りて一度ハ物入敷盃のふとも辞さく。と
 且と幾邦頭を傾け其不文もくその意を暗く。身又相忘れ物多。何
 何よされ宜ひぬ。さけぬらんと諾ひる。回答は時夏大まき飲び。と
 まる。朝夷生の篤長老を心めてよ。長老は化しぬ。ひつそ
 由縁とらぬ。富居ハ和殿の宿所は限らぬ。便宜は就く。のじさ
 とも何ごふとらぬ。とくこの客人を。某が宿所は伴ひ留く。誠心竭

せ。所早の着ハ則られ。終く家の家僕井半が不良の心を挟ミ。罪を
 謝するより。といれと幾邦貌を改え。刀野の懇望を。否とあらぬ
 ども。さうけり。長老の師又外戚の一族。長老命亡と
 とも某めてゆ。朝夷ゆを他一人は任用せん。その美あり。といせ
 由果の時夏の折敷を擡置り。進まぬ。吉見生所望の着と
 せん。と諾ひ。ハ食言。某既井半と和殿も預け。まぬ。金れ。又
 朝夷生も某預り。杖持せん。是當然の理。よら。と言語せし。く
 教團。受邦騒々。色あり。教諭の趣あり。和殿が家僕の罪
 のと朝夷ゆ。と換。況着の酒小かえ。口腹も充る。の。彼朗詠
 今様の不費を勧る料。酒宴の具を費れ。これら着と。と。り
 客人を弄び。これを着。と。不敬め。と。

時夏ときなつもくく越こききを過あ言こと美邦みくに和殿わどのひひるる富とみささええくく客きやくを留とどめめ餘よ財さいををももるる時夏ときなつののゆゆままたたたためめのの欲よく賭かけけひひくく客きやく人ひとを阿容あひらとと嘘うそええややとと罵ののるるハハトト繕つくろ廣光ひろみつ向むかひひくく時夏ときなつををととめめくく和わ譚だんれれどどもも醉よめたたるる人ひとのの癖くせををいいははすす置おききくくとと罵ののすすややぶぶ美秀みしゆのの光景あかりはは必かならずずもも嘆息たんそく一ひと某何等たがひのの洪福こうふくありありくく西君さいきん争あひひめめままぐぐ又また鍾愛しゆあいせせららるるとと争あひひままりりああれれどどもも躬みづかひひとと列らせせ争あひひをを止とどめめよよ由よしはは某たがひはは西君さいきんの中なか違ちがひひ一ひと日ひももああららじじ地ちはは脚あしをを駐とどめめくく他郷たじやう赴おもむかかれれゆゆりりんんとといい果はたたままりり時夏ときなつこれこれはは難がたいいくく上かみ簿ぼよよ目めをを注つけけられられハハ件けんハハ道みちちちろろををゆゆくく船ふねとと美秀みしゆをを推おすす客きやく人ひと且かつ坐ますす貪あみみ道みち聊しか高量かうりやうありあり枉かまてて且かつ坐ますす一ひと人ひととと推居おし居ゐるる時夏ときなつとと美邦みくによりより対たいひひ刀や袷あし袖そでのの争あひひハハ友ともハハ信しんをを失うせせたたとと美みののああららじじ起おこれれハハ靴くつをを褒ほめめられられ客きやく人ひとのの身みをを置おききてて他郷たじやう退ひろろかかつつとといいららもも宜よろししくく也や

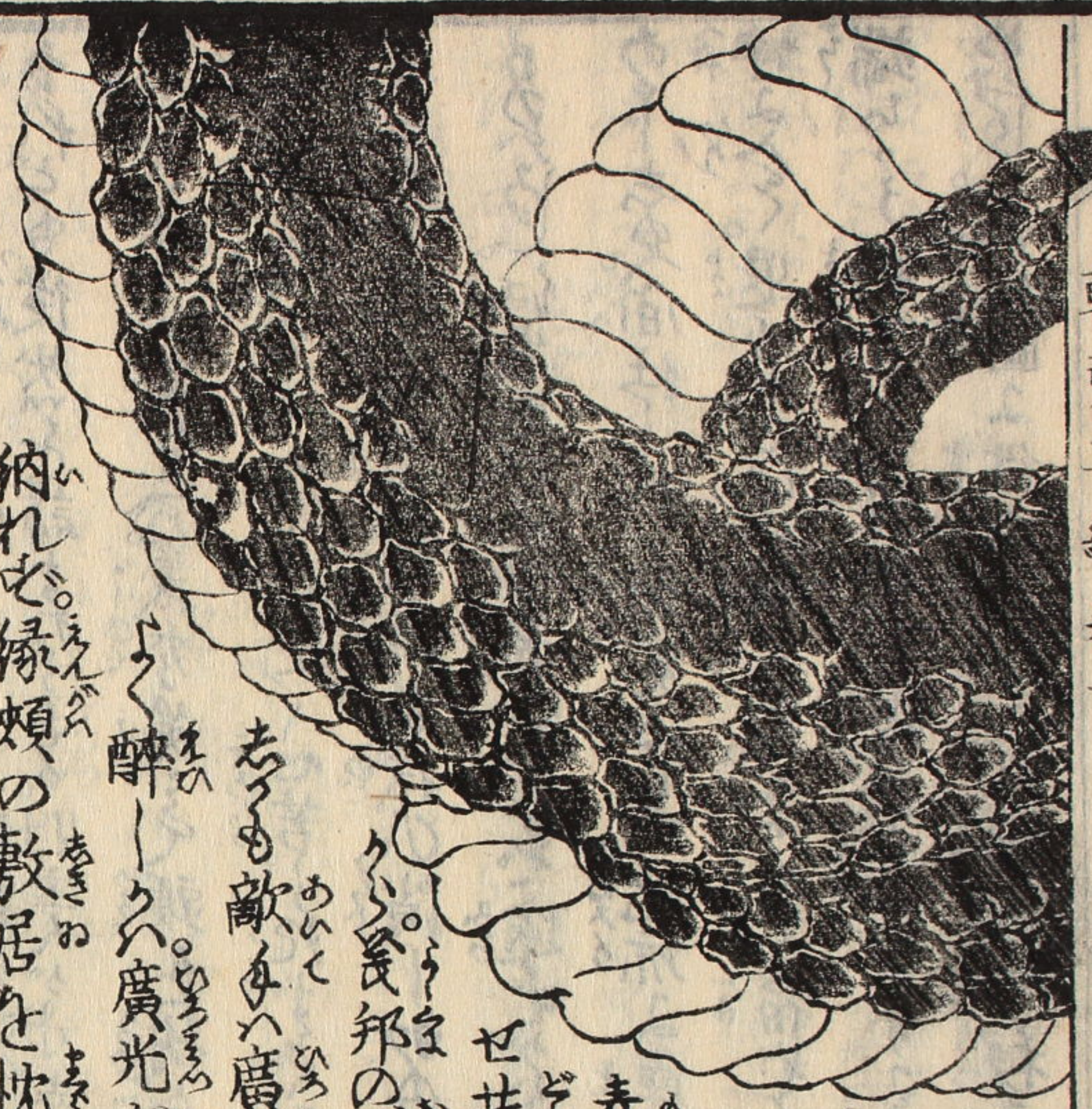
愚おろ按あひひへへともとも當庵室たうあんしつをを旅宿りよどととくく客きやく人ひとをを留とどめめららるるそのその争あひひもも頗おもも鮮ありりゆゆれれもも優やさかかぢぢ珍客ちんかくをを逐おかかしし識しももああららじじうちうち仕しせせららるるとと老實らうじつぢぢららてて和あ論わろんハハ時夏ときなつ笑わらひひ莞令わんれいとと笑わらひひのの談だんををああららじじ冠者かんしやののああららじじをを知しららるるとといいひひくくととああららじじをを信しんとといいるる然しかれれどどもも美邦みくにののああららじじをを又また死しすすののゆゆゐゐりりゆゆゆゆとと廣光ひろみつハハ倚よ痛いたくくとと主しゅのの袂たもとをを掖よ動どうしし目めをを注つけけてて諫いさめめららるる美邦みくにをを中なか面めんををああららじじ扇あふをを笏しやくよりより直ただしし酒さけ氣きはは乘のりとと由よしももああららじじ言葉ことば閉とひひ慚愧さんけい堪たままららずず菴あん主しゅのの和論わろん承知じやうちせせりり三郎ざうらうけけりりああららじじとといいれれくく美秀みしゆハハ一ひと談だんよよ及およびび君きみののああららじじ居まりりののああららじじをを求もとめめてて况いはだだ方里はうりのの逆旅さかありあり孰たれれのの処ところとと宿しゆくををせせざざららずずとといいれれくくまれまれ各おのれれ各おの位ゝのの技わざ助すけををとと志いくく美邦みくに時夏ときなつ大おほききはは教おしへへららるる衣い食くハハ月つき毎ごとくく西家さいけよりより調進てうしんせせららるる西さい三さん月げつもも學まなびびせせららるる學まな校がくへへ入いりりくく留とどめめららるるそのその夜よもも寂さび寞ぼくととももああららじじ起おこ居ゐるるとといいふふ憑たままららずず慰なぐさめめららるる

秀亦これを飲ひて。所を執り。盃を更け。時夏と美邦の和睦の縁を
 扱へ。両人を所も及び。且く辞ひ。遂に不交を交易し。宿意を送
 下とぞ。此彼の問答。春の短夜。曉を。東の山際。志らむ。比時夏が
 従僕五六人。馬の轡牽立。主の迎よ。もみされい。が盃盤を納め。を
 時夏。并辭。一上。膳を并ひ。美秀。がるを。憑ま。當座の施物と
 して。二色の白銀十緒の青鏡。を前。時夏の馬より。乗。従僕。小
 先を。追。と。や。此門。を出。美邦の町。響。美秀。別。を。告。廣光
 并。牛。ホ。を。抱。と。支。物。れ。美秀。上。膳。の。處。縁。頼。の。ほ。ろ。ふ。の。か。要。時
 的。を。同。送。り。ぬ。却。説。朝。夷。三。郎。美。秀。の。心。ひ。る。く。山。と。る。る。草。の
 庵。又。苗。下。く。け。と。暮。羽。を。明。言。葉。敵。も。た。ま。つ。と。り。ふ
 下。野。の。い。う。へ。り。学。校。顔。廢。せ。る。も。多。や。鄙。あ。れ。ど。才。子。多

る。吉見冠者の温順あり。貴公子といふ。乃野太郎。好智の
 方を。妬。賢。を。賊。し。と。あ。り。人。と。い。は。江。二。の。篤。實。多。諸。侯。の
 家。老。と。か。ま。せ。た。め。の。飲。さ。る。も。媪。子。并。平。の。奇。才。あ。り。信。義。の。渠。多
 主。を。妬。れ。ど。も。主。の。の。よ。せ。る。と。な。り。彼。時。夏。が。怒。る。り。并。平。微。り
 必。不。美。子。陪。う。ん。縁。段。や。并。平。が。う。れ。を。射。つ。主。平。な。り。先。の
 的。射。り。後。射。け。の。忠。多。り。美。秀。の。罪。を。身。に
 負。く。主。の。隠。愚。を。顯。さ。る。凡。慮。の。及。ぶ。所。あ。り。今。れ。を。身。に
 揣。る。又。吉。見。主。従。の。交。る。べ。并。平。の。親。む。べ。時。夏。の。近。つ。た。う。り。も。か
 方。人。の。菴。主。の。入。道。上。膳。さ。ら。ち。解。つ。相。譚。く。と。深。念。く。う。り
 對。の。を。と。た。れ。物。の。ひ。け。と。雑。談。せ。ん。又。時。夏。が。宿。野。り。贈。る。酒。食。の
 あり。と。先。上。膳。飲。食。さ。せ。の。ら。ら。る。と。の。助。を。と。り。び。め。と。用。心

せんがむ。訝とあふも。時夏由美邦ゆをりく詣来て後慈を訊慰め
 ト憐へ心を切て。これ又はるめ。如く歎待真成るし。さのさく疑ひを片
 山蔭に春暮れて酷暑に堪ぬ六月の上院に。峯吹かろ久朝の
 風檐下よ。夕の雲霽く六月を搔流せ。背門の鏡の水音さ。夏を忘る
 ぬ。現山居の甲斐るれ。と。八里もなつ。日毎に彼此を細細
 と。耶庵の北月のり。いと大なる竹藪ま。藪よりある。此の山の峽
 あり。南よ入る。千尋の谷ゆ。樵夫も。谷の底間。黒白谷と
 あり。右一日又美秀の筍を振んと。秋金を引捲て出。折美邦の使と
 江三三廣光の小廝。偏提折櫃を齎し。柴門のあり。さ。秋金ゆり
 入。これの美秀。母を。これの。秋金のゆり
 先よ。馳て母屋。誘ひ。と。憐へ。遠く。茶碗を濯て。茶を。送る

恙るを祝し。祝され。既坐も定。當下三三廣光の小廝。ふり。せし
 折櫃と。偏提をと。と。近く。朝夷ぬ。二種。ゆ。る。ぬ。め
 られ。とも。後然を訪。ま。則主人が寸志。なり。ゆる。べ。や。とい。は。け
 恭しく。さ。久。義秀。笑。て。頭を。拊。今。よ。め。ぬ。吉見。ぬ。の。好意
 報。さ。り。時。さ。ん。と。いと。心。苦。死。ま。と。辱。と。を。醫。と。彼。酒
 肴。を。お。り。さ。は。と。憐。へ。涙。を。拭。ひ。消。し。ぬ。ら。る。夏。の。日。酒。ほ。ど。涼。死
 め。の。は。し。江。生。ゆ。り。の。暑。ゆ。ら。さ。途。せ。が。堪。り。け。ん。偏。提。を。披。き。て
 め。と。ま。更。前。仕。で。ん。と。老。實。ざ。ら。せ。地。坑。に。鹿。朶。を。焼。つ。れ。へ。美。秀。も。笑
 婢。よ。入。と。退。ふ。ん。と。の。小。廣。光。を。ま。り。ま。り。留。め。て。寶。主。三。人。小。廝。さ。る。の。ば。と。こ
 端。ら。う。圖。を。び。ん。偏。提。を。披。死。者。を。と。り。ま。り。盃。の。隙。を。死。ま。る。巴。の。字。よ
 め。び。じ。香。の。圖。よ。往。返。し。く。う。の。推。つ。時。移。る。ま。ぎ。お。ぬ。く。数。不。要。を。傾。け。り。



りてとも未の下刻よりし
 久廣光の別を告小厨を俱
 素より酒量廣志と一斗を盡
 せ共酪町を乱るるたれ
 酒のあればさうさだに
 ちも敵の廣光とされ愛彼とて
 酔く廣光かぬると衆と不皿盤もとり
 納れは縁頼の敷居を枕し高軒して熟睡す早と
 夢らるるよとくと思寒くも骨のまをうまわ何えと忽地は驚た
 覺とえれば母屋の簷端より布は似く長たりの諸折戸の裡まを被

日影を掩へ可るるにやぶさぶさ身を起こしつとくればその太サ白
 ひくは巴蛇が母屋の屋棟より突のる半身を出りたりその長サを推
 ろるれは尾は竹材もあるやまへ黒白谷のりたりあり毒蛇ありとやつら
 這奴るまへとどよまそ警告衛の為ふとく後邦の笛を弓前めとまあり引
 固えとく矢声をしけと切て殺せし前へ想は巴蛇の咽喉をぶと串す時よ
 天地震動しその音菴も崩る可く大蛇は全身より落ちて荒浪の打ぶく
 伸つ屈つ苦めば後秀得たりと弓を棄て俱利伽羅の大刀を引抜た大
 蛇の背へのけりつとそ心下を九刀十刃あり刺しけ現不動三
 摩耶の刃の奇特よりさすまんよふ未曾有の毒蛇あれどもよふか
 息絶たり死と後又つとく親るよその形状のおそろいげある背
 苔むと鱗はさながら松よめる鳥紅葉は異るるんんその腹を壁て



朝ひる

巴蛇を
かせんよ
下塔庵の義秀
たつみ

